

モロッコ王国の国王と政治・経済

モロッコ王国は立憲君主国家で現国王はモハメド6世である。1956年6月に独立し日本との国交が開かれ本年2026年は、国交樹立70周年の節目の年に当たる。

モロッコ国民の国王に対する敬愛の念は、私たち日本人が皇室へ抱く気持ちと重なる。

モロッコを歩いていると個人宅や商店の店先にも、そして大都市カサブランカの街角にも国王の写真が飾られていた。写真を眺めながら国民の心は日本と同じだと感じたものである。

国王は、軍の最高司令官であり、国民のほとんどがイスラム教徒である同国の宗教指導者でもある。

国王はモロッコをアフリカの近代国家へ導いている英明な国のリーダーである。同国にとって国王に寄せる期待とその存在は非常に大きい。



モロッコ王国の国王の写真、右端は前国王ハッサン2世

2020年、チュニジアに端を発した「アラブの春」と呼ばれる民主化運動は、アラブ諸国を席捲しアラブ社会全体に大きな変革をもたらした。今に至るもその残滓を引きずっている国もある。

「アラブの春」の嵐はモロッコにも吹き荒れた。モハメッド6世国王はいち早く嵐の本質を見抜き、同国の憲法を変え政治改革を断行する等素早い対応で事に当たった。火種になりそうな国民の鬱積を解放することによって、モロッコの混乱を最小限におさえ、今日の発展につなげてきたのである。

モロッコは外交の名手である。アフリカ協力担当大臣ポストの新設をするなど域内のアフリカ諸国とも連携強化に腐心しながら着実に成果を挙げている。

モロッコ王室は我が国皇室とも親密な関係にあり、国王はこれまで3度来日されているが2005年には国賓として日本を訪れている。

当時を振り返ると、日本モロッコ協会役員並びにその家族が、迎賓館敷地内で両国の国旗を手を、迎える皇太子殿下（現天皇陛下）と主賓のモハメッド6世国王を歓迎する栄誉を担ったものである。

またモロッコの王女、国王弟殿下共に親日的で来日の数を重ねている。

さて国を支える経済の側面からモロッコを俯瞰してみると、モロッコの強みはいくつもあるが、国自体政治的、経済的、社会的に極めて安定していることであろう。モロッコがアフリカ諸国へのゲートウェ

イと称されている所以でもある。

同国はアフリカ諸国の中では欧州市場に最も近い。また投資を誘致するために有利な条件を設定した経済特区を設置していて、日系企業の多くも経済特区を活用している。

すでにモロッコに拠点を持っている企業の話では経済特区を利用するメリットはいくつもあるが、特に土地の手当て、法的サポート、操業に関わるフルサポート、セキュリティー、さらに輸出通関手続きや税率にも優遇措置があるなど、経済特区は企業にとっては大きな魅力だという。

その一方で投資を呼び込むために同国は物流や交通インフラなど国内の整備拡充を急ピッチで進め、さらに法的な整備も同時に進めているところである。

アフリカ大陸に初の新幹線を走らせ、また「タンジェ地中海港」はアフリカ最大の近代設備を備えた港湾施設で、港は巨大な物流基地としての機能を発揮し、すでにコンテナ扱量はアフリカ第一位となっている。

モロッコの経済構造は主に農業・工業・観光産業に支えられているが、GDPに占める割合は農業10%、工業25%、サービス業54%となっている。

モロッコ政府は2035年までに一人当たりGDPの倍増を目論んでいる。2025年現在は4、842ドルであるがこの数値は、ほぼベトナムと同水準にある。日本は35、973ドルである。日本と比較すると同国の伸びしろは大きい。



タンジェ地中海港

雨が少ない年は農作物が不作でその結果は経済指標に

も表れる。農作物の実りは、ここのところ7年間続いた干ばつの影響で心配されていたが、今年は干天の慈雨、雨や雪によってダムの貯水量も上がり干ばつから逃れたのではと言われている。雨の少ない年の“雨乞い”には、国王自ら儀式を執り行ったと耳にしたことがある。

一方天候に左右される状況から脱却するため、大規模な海水の淡水化プロジェクトが進行しつつある。

国土を縦断するアトラス山脈は3千～4千mの山々が連なり、山を越えるとサハラ砂漠へと続く乾燥地帯である。ところどころには日本の援助もあって灌漑用水池が水を蓄えているのを目にする。

モロッコはアフリカ大陸に最初に新幹線を走らせた国である。当時新幹線敷設受注に関係諸国がしのぎを削っていた。無論世界に先駆ける技術立国日本も名乗りを挙げていたが、かつてモロッコを保護領としていたフランスのサルコジ大統領が、国王に直接面会し説得することによって、フランスが落札した経緯がある。

モロッコの失業率は13%を超え、若年層に至っては36%と高い水準にある。従って雇用創出は同国にとって大きな政治課題であることは言うまでもない。

日系企業の現地雇用労働者の数は、自動車部品製造を中心に6、5万人を超えた。この数値は外国企業としては第一位である。

モロッコの豊富なそして優秀で安価な労働力は、企業にとって投資意欲を掻き立てられる好条件となっている。

因みにすでに進出している日本企業の某社の例を挙げると社員の欠勤率は、1、5%、離職率は1、1%と低い。

モロッコはアフリカ大陸における日系企業の進出拠点としては、2018年では55社で南ア・ケニアに次いでアフリカ第3位となっている。直近ではすでに70社がモロッコに拠点を置いている。

モロッコは外交に積極的で多角化外交を展開中である。アフリカ域内はじめ欧米や中国やインド、ロシア、イスラエルを含めた多くの国々と連携を深める努力を怠っていない。

2026年5月モロッコは、工業化指数すなわち最も工業化が顕著であるとする数値で南アフリカを抜いて初めてアフリカ54か国中第一位の座を獲得したと報じられた。

最近の経済成長率を見ると3、8%であるが、すでにアフリカにおいて自動車生産台数ではトップの地位にあるが、自動車や航空機部品・繊維・皮革などの業種ではアフリカ大陸の中では抜きん出た存在となっている。

総じて経済分野については今後とも投資拡大やインフラ整備を推し進めながら経済成長を続けていくと思われる。

2026年、日本とモロッコの外相がテレビ会談を行い話題となった。再生可能エネルギーや自動車産業、食料安全保障、リン鉱石など幅広い分野で両国が協力していくことを確認したものである。



太陽光発電見学



地の果てまで太陽光発電パネルで埋まる

同国は海外投資促進のための投資環境整備に力を注いでいるが、製造業のみならず、再生可能エネルギーである太陽光発電の設置規模は目を見張る勢いで、なお加速の途にあり、国内の電力需要を満たした上にさらにアフリカ諸国への売電を目論んでいる。

モロッコはリン鉱石や銀、鉛などの資源を持っている。リン鉱石の埋蔵量は世界第一位である。農業用肥料や注目の半導体を使用するリン鉱石は日本にとって重要であるのは言うまでもない。これまで72%を中国から輸入し、モロッコからの輸入は21%であったが、今後はモロッコからの比率を高めていくことになろう。

ところで世界が熱狂したFIFAワールドカップ2026では、モロッコは世界の強豪を相手にベスト

8に進んだ。余談であるがたまたまこの時期モロッコへ行っていた友人の話では通りは深閑としていたが、突然家々から人々が歓声をあげながら飛び出してきて何事かと驚いたがカナダに勝利した瞬間であったそうだ。

次期開催は2030年である。スペイン・ポルトガル・モロッコの共同開催となるが、モロッコはこれを好機と捉え、国内インフラへの大規模な取り組みにチャレンジしようとしている。

思い起こせば我が国でも、1964年東京オリンピック開催が決まり日本国中が湧いた。五輪開催を契機に世界に先駆けた東海道新幹線開業や首都高速道路の建設、さらに国立競技場や日本武道館の建設など目を見張る盛り沢山の巨大プロジェクトに加え、先に発表された所得倍増計画と相まって、国民は未来に大いなる希望を抱いたものである。

モロッコは新幹線の延伸や、現在サハラ方面へ行くにはアトラス山脈超えの難路であるがここを整備し新たに高速化しようとしている。また鉄道、空港、スタジアム、通信などの諸分野を視野に置き、大きく変革を遂げようとしているところである。日本が歩んだ道と重なる。

モロッコ経済を支える柱の一つである観光産業は、豊富な観光資源と共に安定した国情に支えられ訪れる人たちに安心感を与えている。

国民自体が持っているホスピタリティー精神などに支えられ、外国から訪れる観光客数は今やアフリカ諸国の中で頂点にある。外国人観光客は2024年現在、年間1740万人におよび、アフリカ54カ国中ついにエジプトを抜いて第一位に躍り出た。

同国にはまた将来構想として検討している壮大な計画が二つある。

ナイジェリアが産する豊富な天然ガスを、パイプラインによってモロッコまで引いて来ようとする遠大な計画である。この計画はナイジェリアから陸路13か国も経由してモロッコに至るのである。当然のことながらヨーロッパ諸国への供給をも視野に入れている。

またアフリカ大陸とヨーロッパを結ぶ海底トンネル掘削の構想がある。モロッコとジブラルタルの間を海底トンネルで結ぼうとする夢の計画である。

良いことづくめのモロッコだが、“好事魔多し”政治的には西サハラに領土問題を抱えている。

西サハラ問題はアルジェリアの支援の下、独立を目論むポリサリオが「サハラアラブ民主共和国」と命名し一方的に独立宣言した。現在これを承認している国は多くはなく、日本は欧米ともども承認していない。

国連は当事者同士の話し合いで解決すべきと裁を下し、西サハラに住む住民の意思を重んじ住民投票で決すべきとしているが住民は遊牧民が多く投票の資格を持つ人の数が把握できないまま未解決で今日に至っている。

また失業率の高さが気になるがこれからの経済成長の過程で徐々に改善されていくものと期待される。- 日本を代表する総合商社の言によれば、モロッコはアフリカ大陸では数少ない投資適格国であると高く評価している。